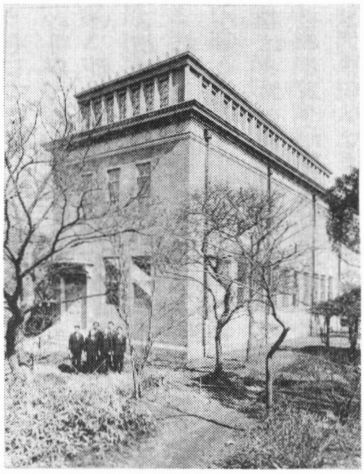
佐々木は大正三年東京帝国大学文科大学史学科卒業。同八年文部属、帝国美術院書記、同十二年福岡高等学校教授、昭和六年名古屋医科大学学生主事、同事務官等を勤めた人で、同七年三月三十日に本校生徒主事となるまでは、本校とは殆んど関係が無かった。彼は同年七月教授を兼任し、同十六年生徒課長となり、同十九年東京高等師範学校教授へ転任する。彼が本校生徒主事となった頃から校内の左翼活動は容赦なく弾圧されるようになった（609頁参照）。ただし、それは時の文教政策の結果でもあろう。

② 陳列館

昭和四年五月十五日、陳列館（本校所蔵参考品陳列館。岡田信一郎設計）が完成した。本書所載「東京美術学校年報」に明らかなように、本校は多年に亙って陳列館建設の要請を行なって来たが、それが漸く実現したわけである。諸新聞の報道によれば、建設が決定したのは前年六月の頃で、『東京美術学校校友会月報』第二十七巻第二号もこれを次のように報じた。



陳列館

本校所藏參考品陳列館建設

多年といふやうな言葉では表せない程前から我々教職員生徒一般が熱望して居た處の、本校所藏品陳列館の建設費が些少では有るが文部省から與へられたと聞いた。聞いた時に並居るものは一聲に「それはいゝ」と心から此の報告を喜んだ。

此の陳列館建設費は數年前から毎年豫算を計上して來たやうだし、此の一、二年は、その豫算を幾等分かして毎年增建の計畫をしたりして居たが、それでも通らなかつた。此度は文部省で昨年の建築費の殘餘が有つたのを本校の此の企に廻されたとかで金四萬圓で百二三十坪の物を建てる計畫のやうに聞いた。結構な事だ。

百三十坪と云ふと今の建築科の建物の下（一階）だけ位なものだそうで、陳列館としては無論尙四五倍はほしい、でも無いと云ふ事よりはどれだけいゝかわからない、今迄は參考品と稱しながら、ほとんど我々の眼に觸れないでお庫の中に埋まつて居るやうな形だつたから、成る可く一般に便利な陳列館が一日も早く建つて立派な參考品が朝夕我々の眼に觸れるやうになつてほしい、その曉には工藝などももつと落付いた作品を新しい人の中から出す事が出來やうと思ふ。

また、正木直彦は『十三松堂日記』に次のように記している。

〔昭和三年〕七月二十四日〔中略〕夫より文部省に出頭　學校陳列館工事設計圖案を其筋に示して之を學校にて直營施行したきよしを申込む　文部省建築課の建築技能は世間定評あるを以て之に託すること不安なるを以てなり〔下略〕

これらの記事によると、当初から陳列館は面積が狭すぎるという意見や、建設を文部省に任せず、本校の希望どおりのものを建設したいという意向があったことが分かる。

本学建築科前野嶌教授のご教示によれば、完成した陳列館は比較的工費の安いコンクリート造り、スクラッチタイル貼り二階建。この建物は『総覧　日本の建築3』（昭和六十二年、日本建築学会）に次のように紹介されている。

この黒田記念館と道向かいに建つ東京芸術大学陳列館、そして今はない旧東京府立美術館は、設計者岡田信一郎の美術館3部作である。この三つの美術館は、黒田記念館の四辻を挟んで近接して建ち並んでいた。ともに茶色のスクラッチタイルを貼り、2階部分の展示室を無窓壁にし、天窓による自然採光とトスカナ様式の柱を象徴的に扱うところは、3部作共通のデザインである。

古典折衷様式の建築教育を受けた岡田は、当時欧米から伝えられる近代建築の中で、「形式と表現とは材料・構造が異なるにつれて過去のものとはまったく異ならねばならない、これ新建築の意義」との結論に達する。そこで岡田は美術館の機能を「壁と光」ととらえ、絵画を展示する主ギャラリーを無窓壁、採光を天窓の自然光にし、それを美術館の表現とすることにした。

開館（展示開始）についての記録は無いが、『東京美術学校校友会月報』第二十八巻第四号（昭和四年十月一日発行）に「本校には近く所蔵品の陳列館を開いて皆様の御研究に資する運びになった」云々と記されているところからみて昭和四年秋と考えられる。因みに『十三松堂日記』の同年の記事中には陳列館の展示に関する次の二つの記述がある。

十月二十九日〔中略〕午後一時　ビニヨン〔ブリティッシュ・ミュージアム東洋部長ローレンス・ビニヨン〕夫妻　獨乙大使夫妻　サムソン夫婦來校　陳列館の古物文庫の繪畫を縱覽す〔下略〕

十二月五日〔中略〕午前十一時半李王殿下台臨　西洋畫科授業台覽　終て陳列館に於て樂浪出土品を詳細に御覽になりて午後一時に御退出なりたり〔下略〕

陳列館は戦後に至って破損箇所の修理や内部の改造が行われたため、多少様相が変わった。現在の中三階と三階の部分は後の改築によるものである。福田徳樹著「資料館この一年」（『東京藝術大学美術学部同窓会会報　杜』3、平成元年七月）によれば、フリーズのようなところ、外光採りの長方形の窓には先頃まで直線の幾何学文のデザインの鉄枠がとりつけてあり、建物の頂には元はアカンサスの葉飾りのような飾板がとりつけてあったという。

なお、「昭和十六年以降　土地建物ニ関スル書類」には昭和十六年九月十日に陳列室を陳列館と改称したと記されており、一時期陳列室と呼ばれていたことがわかる。

③　和田季雄の在外研究、パリ滞在の卒業生たち

昭和三年十二月二十六日、助教授和田季雄は彫刻技術研究のため満二年間フランス在留を命ぜられた。和田は明治十七年四月二十一日東京に生まれ、同三十九年本校に入学、同四十四年彫刻科牙彫部を卒業し、大正十年本校講師兼教務掛となり、「体操」および「彫刻実習」授業を担当、翌十一年に助教授となった。明治三十六年以降軍務に従事し、大正九年には陸軍歩兵中尉となっている。

和田季雄渡欧送別会記念　於倶楽部

（『東京美術学校校友会月報』第27巻第8号より転載）

和田は本校校友会において月報編輯主任、文芸部副部長、同臨時部総世話人、乗馬部長、卓球部長、運動部臨時部各部部長として生徒のために尽力していたので、渡欧の際は盛大な送別会が催され、昭和四年二月二十七日、彼が夫人同伴で東京駅を出発した際も大勢の見送りがあった。二十八日神戸より伏見丸に乗船、上海、香港、シンガポール、コロンボ、アデンを経てマルセーユに入港、四月九日にパリに到着した。

和田は帰国後『東京美術学校校友会月報』第三十巻第四、五、六、八号、第三十一巻第二、四～七号に「欧洲紀行」㈠～㈩を寄稿しており、また、同誌の海外消息欄には和田をはじめ、彼と同時期にパリに滞在していた本校卒業生たちの手紙が多数掲載されているので、それらによって滞在中の様子を知ることができる。パリ到着後は矢沢弦月らと日本美術展覧会の準備に忙しい日を送ったらしい。それが済むと美術館、博物館、諸展覧会、遺跡を見学するなどした。彫刻家に師事して学ぶことはなかったようである。秋には十月五日のブールデルの葬儀の模様やパリで九月二十九日に死去した板倉鼎（大正十三年西洋画科卒業）について校友会に書き送り、冬には川村清雄作品のリュクサンブール美術館への入館式（十二月三十日）に列席したことや、装飾美術館のフランス陶器特別陳列のうち、セーブル出品物中に沼田一雅の作が二点出品されていること、一九二九年のサロン・ドートンヌに本校卒業生の長谷川潔、故板倉鼎、小沢秋声、小磯良平、中西利雄、荻須高徳、山田新一、田辺喜規、島村三七雄らが入選したこと、上杜会のパーティーに招かれたことなどを報告している。上杜会についての報告（第二十八巻第八号所載）は次のとおりである。

上杜會の第二回展を、東京と大阪の丸善でやつて、好評だつたと云ふ記事を月報で見て間もなく、その會員の一人で、ポルトサンクルーのわきに居る山口長男君から、上杜會の巴里支部會？